

實成院日典聖人

全

日蓮講門宗管長

横山日省稿

實成院日典聖人

現 岡山県御津郡御津町野々口出身
後奈良帝享祿元年月 日不詳生
後陽成帝大祿元年七月二十五日遷化
六十五歳

目次

- | | | | |
|-----|----------------|-----|-------------|
| 一、 | 日典聖人 | 十二、 | 四方堅め |
| 二、 | 御一代の大要 | 十三、 | 日典師行場跡 |
| 三、 | お母様の出所 | 十四、 | 實成寺跡 |
| 四、 | 日典師年次区間 | 十五、 | 大村家に関する史蹟 |
| 五、 | 日典師の年齢 | 十六、 | 日典師に関する奇蹟 |
| 六、 | 日典師と前後周囲の宗門界一班 | 1、 | 靈鷲山の鐘の声 |
| 七、 | 高弟日典聖人の正義 | 2、 | 手拭まんぢら |
| 八、 | 日典師御出身についての諸説 | 3、 | 白頭の烏と火難除け棟札 |
| 九、 | 大村家所藏御本尊 | 十七、 | 日典師の行徳 |
| 十、 | 大村家系圖 | 十八、 | 日典師のお弟子 |
| 十一、 | 日典師の産湯井戸 | 十九、 | 日典師の著書 |

はしがき

一、此の原稿は今から約二十五年前昭和十二年七月頃のものである。恰度七月の梅雨の時分、時の管長佐藤日柱次席格の横山日省、管長の弟子高矢惠教三人テイ座して、愛宗の意見を交換した時、正法の光頭には先哲の体験、遺訓が我々の血となり肉とならなければならぬ、依つて各方面の史跡の調査をせよ、伝説に、口碑に断簡零墨一草一木たりと雖ども一々収集せよ、ほつておくと湮滅してしまふ惧あり大にやろうとなつた、其第一歩として野々口の日典聖人の史蹟調査を始めよう、まだ誰れも他に此調査をやつて居らぬらしいといふので、私が相當することになつた。是れより先き岡山教会の信者、横井、中原の国光タカ老婆が野々口の大村家が親族先になるから先方の承諾を得て御案内するとの事であつた。国光老婆の申告によつて昭和十二年七月三日高矢が大安寺の野衲を訪れ打合、来る八日管長、日省、タカの三人が大村家へ行くと決つた、豫め大村家えは調査の順序、方法や資料がどんなものがあるかを問合はして時間や手敷にムダがないようにして置いた、そして七月七日晚迄に日省、タカ兩人本山本覺寺に同行一泊、八日早朝管長共三人揃つて行つたのである。其日は相当暑くマヤ天気であつたが、晚五時頃史蹟の写真を目

省自ら撮る時にはホツ／＼降りだした、午前十時寶成寺跡を撮る時も少雨但し此の
寫眞費は高矢奉仕原版保管鬼に角大車輪の調査であつたが、大体大村家としての物
は多いが日典師に関するものはそう多くなかつた、大村家のものを調べるうちにも
典師史跡の傍証になるものでもとつとめて探した、大体要領得て引上げた、其際大
村盛長氏からなみ／＼ならぬ優遇を受け且つ便宜を與へて頂きました。典師御出生
について父母、兄弟とか其他の關係が頗る複雑で到底現在の資料だけでわ断定が
かなひ遺憾があるが誠に筆者の不熱心の責を感じて居ます。それで此の資料と、備
前法華の由来、早島の古い過去帳、万代亀鏡録、口碑、日典様の本尊の授與書など
を参考として最初原稿を作つて見た、それから本化正宗時代宗務所で発行するとい
うので差出し詮議して貰つたが、そのままとなり東亜戦争がながう續いた、今筐底
から昔の原稿を出して見て日典様の真相をあやまつて居らぬかを心配したが筆者七
十七の老齡でもあるのでとにかく何かの方法で公にしたいと考へたのである勿論大
方諸賢の叱正を希う次第である。梅檀は双葉より香ばしという通り典師十四歳初
転法輪つまり満堂を前にして初説法、多大な感銘を興えた、非常な麒麟児であつた
こと史の証する處であるが、誕生が妾腹の説も反てよろしい、宗祖も自ら漢師の子
なりと仰せあり平民佛教の創始者を以つて任じて居られる。家門に囚われる必要更

にない、専ら民衆の師表たるを身につけ教法の宣布に努力されて居る、従つて、私
生活の面はどの御先師のも詳でない、僧形肉食妻帯など止、楊の記事殆ど見当ない。
宗祖も、させる妻子をも帯せず奥息をも服せざれども余のソシリ天下に満つて憤
起され、日典師も研心鏡に、家族が出来ると財用不足勝、貪慾生ずる、貪慾生ずれ
ば常倫を害し師表を傷付けるとして行者は独身がよいと決して居られようだ。但し
此書筐底深く入れて公にせず度々見失うとあるから自省自戒のためであつたらう、
其他はあまり見当らない、日典聖人亦單身不惜身命、身を正法宣伝に捧げられ弟子
十三人法類四十六、新機に又旧機に頽廢せる寺々、創立、再興十数ヶ寺に及んで居
るから、教育に經營に宗門の偉材であつたことを証する。そこで近時僧形の生活は
どうあるべきか、最早僧形昔とちがつて国民生活の中にあつて特権地位は認められ
ない、印度の跣足が靴になり、日本料理が西洋になつたようなものか、然しほんとう
に法に捧げようとするれば独身主義がよいと思ふも人間界であるので規制は遠慮した
いが不惜身命の覺悟は持たねばならぬ、唯、師表たるを身につけ、高い人格を堅持し、
古典學は勿論、毎に新しい知識を吸収して指導者の見識を失つてはならない、昔
は何事もお寺の和尚に相談や指導をうけて居つた、今は中学生の疑問にも答えられ
ない凡僧が多い、それでは教化は出来ない、既成教団の眠りはモ―此辺で醒めさるべ

さではなからうか、昔とちがい生活だけ自由で、あと何のプラスにもなつて居ないのわどうしたとか、本化上行所伝のお題目の宝珠をお取次ぎする僧形の指導者其任は頗る重い、すべて盛衰興亡は世の常であるが宗教の施設及び教勢も亦同じ、信仰の厚薄、政治の推移で往時のままが續かない。備前法華の最盛期乃至現代に及んでは影も形もなくなつた所もあり、新興の所も出来たことは当然であらう、茲に於て宗教も時代の窺見である新しい時代感覚を加味し其持ち味を生すように進めなければなるまい、既成宗教であるからとて油断すると土台ごめに荒域の月とならう注意検討を要する、然らざれば各先師の功を一簣に減ぼす。株を守る愚を戒む。先覺者の功勞を生かす資料を提供し後進を激励するに油断があつてならない、此の郷土史の一環も其一つである、殊に宗教方面の先師は人の心をきれいにする靈界奉仕の慈念に徹して居るのだから是等を高揚することは人心を圓滿に、過めて行く大いにおかげがあらうと信ずる。

昭和三十七年七月十二日

横山日省合掌

昭和十二年七月

横山日省稿

一日典聖人

佛祖統記云

六牙院日潮聖人著 (京都深川の元政(仲山)に師事學徳高かつた聖人)

師の諱は日典、洛の妙覺寺十八代の主也、越後の長尾家が兼て佐州(佐渡の国)を領す、部將直江山城守景綱(景継)の世々法華宗なり、師と道契尤も篤く、且つ家に通うこと好む、是時三戦国にて私面すること能わず、主人は鎌信に告げて千里をゆき師に屈せしむ、師往きて教化す、因に塚原を拜す、日成役後三十余年、殿庶相、傾き食輪停す、師謂く、塚原山は吾祖苦行の道場なり、本懐快暢の靈窟なり、日成の功、旋く衰微せるに就て是れ忍ぶべきや、孰か忍ぶべからずや、遂に直江氏に謀れば直江氏之れを領して、地を割り俸を領け以て官寺と為し伽藍一新せり、師の功不多し、仍て崇めて第八代の主と為して之を祭る、文祿元年壬辰七月二十五日洛にて化す、初め紀州治邑、偶々勝地を得て手一廬を創す今の吹上本光寺是也云

(此の原本は漢文なり今和訳す)

二、御一代の大要

御生立り後奈良天皇。享祿元年（大永八年八月に享祿と改元す）皇紀二一八八年、御出生月日不詳、岡山縣御津郡御津町野々口（旧宇垣村野々口）中国線野々口駅所在地、大村家の出身也、姓大村氏は金川城主松田氏の老臣、大村浅右工門で大村出雲の一族である。譯は日典、實成院と號す。

幼にして同村駒井山實成寺に入り日悟聖人に就き出家し、後ち笈を負うて關左に遊び池上本門寺日現聖人に師事し業を卒へ、上杉景勝の謀臣直江景綱の歸依をうけ、請せられて佐渡に渡り、日蓮大聖人靈蹟塚原根本寺再興其弟八世とせられた、尋で下総藻原常在山妙光寺に移り弟十三世となる時に三十六歳、後京都妙覺寺に入り弟十八世となる時に三十九歳、此時身延山久遠寺日新使を遣はして其行をさかんにし大に期待する所があつた、以て其如何に当代の重鎮たりしかを推知する。日典師妙覺寺に入るや其荒癩をなげき一擧戒力を奮起し、伽藍一新輪奐其觀を改めた、遺弟日與聖人が日典師の御法事二十五回忌の時の歎徳文の中に、典師存日の徳行を業するに乃至修造建立の思深うして堂宇軒を連ね伽藍を結ぶ云々其光景の燦たる全く師の徳行に帰すとある、今の僧個人生活を華美にし、信心足らず堂宇荒廢全く僧

形の資格を失うものある慚愧すべきである。

元龜二年（正親所天皇皇紀二二三一）織田信長比叡山を焼く山僧藏書を携えて京都に遁れた、日典師之れを聞き其散逸を懼れ、之れを購求し寺宝とした、当時比叡山の珍籍妙覺寺にありとの風評天聽に達し、准后殿下珍籍一覽のため行啓ありしといふ、高弟日與聖人歎じて曰く佛像經卷靈宝章疏山の如く之を集め法命相續の善巧となす、其徳天聽に達し歡感他に異り攝政関白自ら來臨之れ有りて書を見、文を開いて深く師徳を歎ずと。

紀州宇治寺に勝地を選び一寺を創す、今の吹上本光寺（永祿十二年皇紀二二一九信長二条城を築き足利義昭之に居る時、天正二十年文祿と改元）文祿元年七月二十五日京都妙覺寺に於て遷化せらる、御歳六十五歳徳澤末代不朽、お墓は妙覺寺にある。

三、お母様の出所

御津町野々口（旧宇垣村野々口）地方は昔からお典師様と伝稱して追慕措かず、日典聖人は大村家出身ではあるが、妾腹であると伝う、産湯の井戸は大村家になくて小字吉尾小坂の母の里に残つて居る、あとで詳説する。日典師得度せられたに實成寺跡、今一字の看經堂のちいさいのが建てられ、報恩石碑

も建つて毎月三十日看經講座を聞いて土地の人まじり香煙があがつて居る。寺屋敷跡に一本の公孫樹の大樹がある。

四、日典師御一代年次区間

此年次を並べて其間の典師の御動静事蹟を調べるのが目的であるが資料が手許にな

いので後日の研究を約する、敢に詳説は出来ない。
後奈良天皇享祿元年御誕生から後陽成天皇文祿元年(天正二十年其年文祿改元)七月二十五日遷化まで、皇紀二一八八から同二二五二年に至る六十五年間の御一代、百の五代後奈良天皇(皇紀二一八八)

享祿(五ヶ年)大永八年八月二十日享祿と改元。

天文(二十ヶ年)享祿五年七月二十九日天文と改元、天文十年(日典師十六歳此歳寶成寺入門、或は九歳の時といはれる。

百の六代正親町天皇、後奈良院の王子、文祿二年正月五日崩御。

弘治(四ヶ年)

永祿(十三ヶ年)

元龜(四ヶ年)

天正(二十ヶ年)

百の七代後陽成天皇

文祿(五ヶ年)

右年次区間中、主なる事變、政治情勢其他。

享祿四年六月八日、三好元長、細川氏を厄ヶ崎に亡ぼした。

天文元年三月、細川春元、三好元長を亡ぼした。

此天文から寛文に至る約百二十年間備前法華隆盛を極めた。

天文六年七月十一月、北条氏綱、河越城を陥れた。

天文七年三月、武田晴信は父信虎を逐い甲斐に自立した。

天文七年十月五日、北条氏綱、足利義昭と總の台に戦うた。

天文十年七月十九日、北条氏綱卒す、氏康が継いだ。

天文十一年十二月二十六日、徳川家康生る。

天文十二年八月二十五日、^{オトルカレ}葡人鉄砲を種ヶ島に伝へた。北条氏康、上杉憲政

を走らし関東を氏康の手に帰した。北条義時辞し義輝征夷大將軍となる。

弘治元年七月、川中島の合戦があつた。

弘治三年九月四日、後奈良天皇崩御、日典師三十歳。

弘治四年を永祿と改元す。

永祿三年正月二十六日、正親所天皇即位式。同年五月十九日今川義元、桶狭間にて戦死す。

永祿五年十月二十四日、正親所天皇密書を信長に賜わった。

永祿七年八月十五日、野々口の大村長門死亡。松田氏の老職知行三千石領地十七ヶ村、(日典師出身の家)

永祿十年十月十日、大佛殿兵火により焼けた。

永祿十一年七月(皇紀二二二八)金川玉松城主松田氏滅亡。同年九月二十六

日、信長、南蛮寺を造り大いにヤソ教を尊信した。宇喜多秀家は御律郡宇甘の虎倉城主伊賀久隆と結び松田氏を七月夜焼打した。日典師四十歳の頃。

元龜二年九月十三日、信長比叡山を焼く。

天正四年信長安土城に移る。

天正七年五月二十七日、安土城で日運聖人、浄土宗と宗論を行う。日典師

が天正七年三月御本尊を書かれ「市太郎後興之」とあるが岡山市泉田近藤庄八家に藏す大村家系圖によれば大村盛之のことであつて此時日典師五十二歳。

天正十年六月二日信長京都本能寺で亡ぶ(四十九歳) 日典師五十五歳

天正十年八月十五日秀吉、信長を徳大寺に葬る。同年六月秀吉、備中高松城

水攻めした。

天正十一年十一月秀吉大坂城を築く。

天正十四年十一月七日正親所帝讓位同十一月二十五日後陽成帝即位式。

天正十九年十二月秀吉関白を秀次に譲り自ら太閤と称す。

文祿元年七月二十五日、日典師遷化、六十五歳。日典師遷化後四年にして

有名なる大佛供養事件がおこつた。

文祿四年九月から不受不施事件で有名な大佛供養始まり典師の高足、日典聖

人の苦闘となつたのである。

五、日典師の年齢

日典師生涯六十一歳、又は六十五歳の二説について、前記享祿元年から文祿元年七

月二十五日御遷化六十五歳説のほか六十一歳説がある野々口方面の口碑、土地の

人々の伝えでは悉く六十一歳説である御終焉は妻のない文献がどうかと思ふ唯一つ

妹尾町早島妙法寺の古い過去帳に天文元年壬辰誕生、文祿元年壬辰七月二十五日遷

化六十一歳とある、然し此記事の原據はどうか、野々口の寺から後世、現岡山市外
花尻へ、それから早島えと転移した典師の遺弟子孫の伝来の古い過去帳と推定する
ので事實に近いかとも思ふ、ここで前記の妾腹メカケバラであつたというのは、産むのに里方
へおろされる、そして産む何年かの間ひそかに、それから五歳位になつて父えお目
通りを許されて公になるという順序を想像すると、四、五年位は誕生年月のおくれを
其間の消息で想像出来るかとも思う、これは別に重大な問題とは思はいが父系の御
身分の上を想像して、あとの記事に供へたい。

六、日典師と其前後周囲の宗門界一斑

大覺大僧正備前開教以来、松田、宇喜多、小早川、諸氏の帰依によつて宗界大繁昌、
天文から寛文に至る約百二十余年間は最も隆盛を極めた、従つて其間名僧碩徳の輩
出があり、典師亦其間の名僧であるので少し日典師について述べる。

備前は宇喜多氏関ヶ原の戦に敗れて小早川秀秋の所領となる、中納言小早川秀秋は
肥後守家定の五男秀吉の義子、小早川家を継ぐ、然し秀秋は慶長六年備前に入り、
同七年十月十八日薨去治世僅か一年六ヶ月であつた。

天文の頃池上本門寺並に西京の本行寺の住持たりし日現聖人（永禄四年七月二十一

日遷化）に師事し勉強せられた。

元慶二年二月八日（皇紀二二三一）付御津郡御津町野々口（旧宇垣村野々口）住人入
村浅右工門筆記に係る「梁曼茶羅由緒書」に曰く日典聖人は余が俗縁の舎兄也云
これは日典師四十四歳の時に弟の浅右工門がこれを書いたことによる、此記事は忍
田頼輔博士の備前法華の由来に據つたもの、はり、まんだらとは、棟札のこととで、
新築をした場合、先づ地祭をやり、次で家を建てる時、むねに妙法まんだらを認め
た木札を打ちつけるので火難除けの御祈禱札のことである、日典師の此梁曼茶羅の
あつたことは奇蹟の一つに伝承されて居るからあつたに違いないが、果して何人兄
弟であつたかに至つては更に考証がいる。

一説には典師の兄大村越中守新八郎は宇喜多に仕へて征韓に従軍せりという、然し
松田氏は宇喜多に滅ぼされしもの、此新八郎は典師の兄か又は浅右工門には兄だが
典師には弟となるのか、これも兄弟何人ということと順序が詳かでないので記事だ
けにとめて置く。

日典師、備、作地方御巡錫は永禄十二年十二月頃かと思はれる、前記大村家の「梁曼
茶羅由緒書」中に「然去永禄十二年己冬在下洛於日向山妙園寺御説法云とある
ので（忍田先生に據る）

但し此妙園寺は松田氏の建立、金川の春谷ケンダニにあつたので現在は瘞寺ケシとなつて無し、但し現在金川町内に「妙園院」と称し、ちいさいお寺があるも移転ではなく、昔のおもかげを慕つたものである。

旧記に曰く上畧此權守松田元隆は文明五年（土御門帝、皇紀二一三三）富山城（岡山市大安寺山上）にて病死これを津島福輪寺に葬る、松田氏は代々日蓮宗尊信しけるが故に此寺日蓮宗に改め元隆の法号「妙善」といふ故に妙善寺と改称すと伝えらる。

元隆の子、元成、これが松田氏中興の英主、文明年間金川の玉松城に移つた、松田氏は備後の山名氏と結び、和氣の天神山の城主浦上氏に叛し西備四郡を領有す、元成亦父に似て日蓮宗を信じた。其弟元満をして金川城下に妙園寺を創立させた、元満は出家して華光院日精と称し、講門歴代十二代の日寮聖人に師事した、

松田孫次郎藤原元勝（法名皓月）京都妙覺寺日寮聖人に師事、日寮聖人は前記の通り文明十七年四月一日遷化妙覺寺第八世となつて居る。日寮聖人が元勝へ授與されたお曼荼羅が赤磐郡五城村字新庄、松田堅道氏所藏してあるのは、其授與書に文明十六年甲辰八月時正初日園之信心施主松田孫次郎藤原元勝法名皓月授與之とある。

元勝は父元成の戦死を悼み赤磐郡の可真村に大乘寺を建立す。元成は和氣の天神山の浦上氏と吉井川の東天王ヶ原に戦つて深傷を負い、赤磐郡矢神村（現彌上）の山の池といふところで自害したものの、大乘寺は寛文年間には瘞寺となつて居る、元成の墓は山の池に残つて居るとのことである、何事も盛衰興亡はあるが、昔の大名、豪族の菩提寺としての寺々は優遇せられるかわりに年の移り変りや政治機構がかわると、ひとたまりもなくつぶれてしまふ。動く水は腐らない、安閑がよくないらしい。

さて是等は日典師に直接関係はないが外郭として同師の信心線ののびを見るわけである。

日典師が宇喜多河内入道に授けられた御消息文で天正年間の正月十一日付（金川妙覺寺藏）のものがある、河内入道とは遠藤河内といひ、現御津郡の加茂に居住して居つた浪人、後ち、宇喜多家に仕へ備中松山城主修理亮家親を討つた功により四千五百石を貰ひ、御津郡宇垣村河内の徳倉城に居つた、其子出家して金川妙園寺第九世日欣となつた、左に妙園寺歴代を要録すれば、

一、妙園寺開基 日精（松田元満）

二、日範 三、日悦 四、日審 五、日賢 六、日詔 七、日吏 八、日城 九、日欣 十、日航、此中で自行院日城は有名な祈禱僧で、鍋墨で御本尊を書かひ居られるので有名である、日航は雷を封じられ有名なり、或時金川に落雷があつた、間もなく晴れて、ソ

イ、取残された雷神は神通を失つて空へ昇ること出来ず、レヨンボリして居るのを

日航聖人愍み給い、汝は炎天下野も人も疲れ切つて居るところへ夕立沛然として万目一斉にうるほいをまし涼氣、人をよみがえらす誠に調法である、然し過つて雷の墮落による被害を悲む、依つて今後金川の地には絶対に落ちないと約束出来るならば再び天上に帰らすべしと、雷神平伏して約を堅くし昇天を希う、依つて日航聖人珠敷を御手に合掌して、是時其父、還来帰家と鳴え壽量本佛のお立合、願つて各々其所を得せしめ玉へと仰せられる、不思議や天遣かなるところに一点の黒雲起り、見る間にひろがりて下界をさしておりる、地上から丈余に及ぶや、杖の先に雷神を乗せて、ツイツと上にあぐれば忽ち黒雲に乗つて閃光一礼、天に帰つた、それから後ちは絶対に金川の地には落雷なしという、爾来日航様の御本尊を雷除けの御本尊として重寶する。近來科學の振興に魅力を持ち、奇蹟に感激なきが如きも、万象各々其ところを得せしむる法則によるものであつて、天は天、地は地なり、下界に在るもの、天を犯すべからず、天上にあるもの亦下界を卑まず。空を犯せば必ず下界に害あり及つて炎天下稻葉もよれ／＼となり山野人畜疲れ果てた時に夕立忽ち到来せば万象よみがえる、この雷神のおかげの偉大なるを知る時、法力によつて雷神の還帰即ち正規にかえす何の不思議があろう、當然の法力といつてよろしい。

後日航聖人妙園寺を退去し相模三浦郡金谷山大妙寺に移り寛文三年癸卯六月四日遷化されて居る。

さて日航聖人が此妙園寺に臨まれたのは永禄十二年の冬、御遺弟としての日奥聖人は元和の初年何れも備、作、巡錫され妙園寺で説法せらる。前記日航聖人の代に及んで松田氏の衰運、従つて正に非なるを知つて、寺宝を金川の土豪江田太郎左門に托して去られた、明治九年現在の金川妙覺寺許可なるや全部妙覺寺へ奉納されたと、金川の江田姓は其末孫である。

日典師に逢れて備前邑久郡福岡に佛乘院日惺聖人が出て居る（天文九年お生）三十二歳延山及池上の住持となり関白二條昭実公猶子の契りを結ぶとある（佛祖統記）此日惺聖人について、日全、日衍、日習、日紹、日樹、日航、日船、など輩出す、日紹は金川、日樹は備中黒崎、日航は松田家出身、日全は北越に遊化、高岡、富山、加賀、金沢に、妙園寺を創し京都の妙覺寺に隸せしめ（寛文元年遷化）日衍は北越に、越前妙恭寺を開く、日紹は幼名日紹、後日紹と改むと（佛祖統記にある）金川出身なるに尊敬しないのは此人後に受不施に転落し不受不施に反すと（沼田先生備前法華の由来）にある。

佛祖統記曰く

慶長四年亥巳妙覺寺日奥宗門に於て不受の義を立て、一宗にあらざる者は、固し雖
えども忌みて受けず、是に由つて既に公許に及ぶ、乃ち東照宮(家康)の命を以て之
を大阪城に於て決す、師乃て之の爲め偶而受用の義を述べ、現旨援証明瞭也、奥の
屈と爲す云

右の如く日紹連署して日奥を彈劾するに至つた、故に家康は慶長四年十一月二十日
大阪城へ召喚、時に日奥聖人頑とし聞かず敢然として不受不施を主張、依て殿中に
て衣を剥ぎとられ對馬へ流罪と決す(萬代龜鏡録御難記)

七、高弟日奥聖人の正義

ついでに日典師の遺弟日奥聖人の不受不施問題に及んで少し記する、日奥聖人在島
十三年慶長十七年赦されて京都に歸られた、其後備前方面への巡錫は、専ら不受不
施強義布衍のため、巡錫当時の元和年間付の奥師の御本尊、長さ一尺位のものも備
前の到る処の信者が持つて居る、

これは土産まんざらと称して、不受不施信者特に信心堅固の方へ、みやげとして御授
けになつものであるとの口碑岡山市大供の後神關次郎氏も言つて居つた、実は資格
証明であらう、ほかに宗祖の版木御本尊に奥師直筆のカケハンのある分もある。こ

ういうことは、宗祖も日違が判を持つたざらんものは云々御妙判の記事があり又日講聖
人の千幅まんざら等思ひ合せてうなづける。前者は佐渡へ御流罪の時、面會の資格
者として御直筆のカケハンを持つて居るものに限ると。後者は九州佐土原流罪の御
信者へ懷中出来るようなちいさいおまんざら兩側に我不愛身命、但惜無上道とある
分、現在信者間に沃山残つて居るがこれも不退転の信者、といへよう、面會の時の
資格證。

池上本門寺日愷聖人受、不受の問題調停に立つたが間もなく遷化せられ、其後調
停に立つた人が唯心院日忠、筑前博多に国主黒田氏の尊信を得て寺を建立、日奥聖
人對馬に流さるるや、其赦免歸洛(京都へ歸る)の途路、日忠を訪問されて居る間
柄、後日、日忠上洛し、前に日忠備前に居つた時、蓮昌寺の日紹を知つて居る、其
日紹が今は京都妙顯寺に在るので日忠双方に出入し、受不受問題の調停に成功、終
に日紹諸寺名代として妙覺寺日奥の許に改悔言上に及んだ、一應平和克服と見えた
が、寛永三年九月將軍秀忠の夫人浅井氏(寛永元年九月六日薨)の法事に池上日
樹聖人布施を受けず、身延の日羅は布施を受く、且つ日奥を難詰した、よつて終に
身延無間山と呼ぶに至つた、日羅たまらず寛永六年二月訴狀、日樹側も亦寛永七年
二月訴狀(皇紀ニニ九)後水尾帝、家光時代、茲に於て老中酒井雅樂頭忠世の邸

で黑白問答対決となつた、其結果對論に日樹聖人は勝つたが、上意違背の科として不受方の關係僧を左の通り流罪處分となつた、季細は(身池討論記當時のものを岡山県御津郡御津町本覺寺藏す)。

日樹——信州伊奈

日眞——遠州横須賀

日弘——伊豆

日領——奥州相馬

日進——信州上田 (御津郡建部町小倉出身)

日亮——奥州岩城

右の通り流罪と寛永七年四月五日処決、

日與聖人は寛永七庚午三月十日六十六歳で遷化されて居るので死後の流罪となつて居る、

ここに遺弟日與聖人の行動にまで記事を延長したのわ、日典師は遠大なる宗門教育家であつて、よりぬきの門弟十三人もあり、寺塔建立修理教ヶ寺に及んで居り、此教育効果がやがて宗門の危急を救ひ、宗風の刷新をはかつた事に及んで典師の戒徳を証するためである。

由來不受不施といふことは不正不義を排撃して純潔の思想信念の上に立つ道標であつて釋尊最後の説法涅槃經の中、金剛身品ばんに説かれてある、要は佛陀人格の組成要素となつて居る、従つて法華行者の人格は勿論不受不施主義でなくてはならぬ。

近代語でいへば紳士道である故に末法に於ける法華經の實踐指導者たる上行菩薩即ち日蓮聖人所伝——所謂上行所伝のお題目を信心する者は不受不施でなくては其資格がない、故に本門の本尊、戒壇、題目の三秘も名だけ本門と冠しても内容に不受不施の實踐なくば上行所伝の三秘は成立しない、前記道標といつたが場ばに約すればそうだが、基本原則としては法門の中心内容となる、如何に施設、機權の整備があつても此義なくば、人に約した場合、何等の交渉もない、靈氣野放しでは我等に絶縁となる、天台過時の一カッなど此際問題でない、上行所伝は、人なり信なり力なり生命なり、此所伝に疵がつく大事が起きたので斯くなる宗門ご法の死法問題に直面して闘つたのが日典聖人のお弟子日與聖人、要するにこれ日典聖人の教育効果に歸するものと断言する。

八、日典師御出身についての諸説

日典師は備前野々口の大村家に産るといふ説は今迄の諸記録や口碑も大體一致して居

る、大村家は今の野々口の^{ほんむら}本村にある、父は大村左工門尉監織の次男となつて幼名實成丸、兄は大村越中守新八郎で宇喜多家に仕へて朝鮮征伐に従軍したとある、母は野々口小坂の吉左工門の女とある、現に産湯井戸あつて、後年典師の石碑を建てちいさい御堂もある、大村家より西方約八十余のところ、これだけなら簡單であるが仲々そうでない、大村家の古記録も矛盾して居る所がある。

日典師は幼にして(九歳)野々口在の駒井山実成寺に入り日悟聖人に師事するとある、此寺跡は大村家の東北約二丁余の山麓にあり、典師成長されて(十七歳)説あるも不詳、關東、京都等へ學問に出られた。某日、日典師靈夢を感じ日與を得とある。(萬代龜鏡録奥聖鑑按萃)此わけはあとで述べる。

四頓院 (実成寺住職)

四乘院 (同寺の僧)

世安公

これは大村甚左工門大夫元盛の事で入道して世安と称し日典聖人の父という、然し大村家代々に盛の字が名について居るので大村系かと思う。

一、大村家系 追加

日典聖人が大村家出身(平氏)土地の口碑も一定し、典師の師匠日現師から大村家の長門、家盛、元盛等代々授與された御本尊が多々あり日典師のものもある。此点からも關係が深いと思う。日典師が師匠日典師の二十五回忌の時の追悼文に、先祖は孝靈天皇御裔とある(藤原氏)そこで父系は大村家。母系が高貴の裔ではないか。小坂の産湯井戸のすぐ上の山には例の八百屋お七のムコの墓がある附近一帶奈良朝時代の古い瓦が出る(昭和一二、七八午後四時頃調査)相当由緒地らしい、土地の古老の言も一致して居る。此地は大村家所在より相当古いか又一つ日典様時代と推定する大村長門、出雲、家盛、元盛、盛之、等續柄、死亡年月日が後世大村系圖焼失、後年こしらえたとの伝説で、どれが日典様の父か分りかねる。年次から出雲、長門、元盛、の順ではないかとも思う。地方の口碑では大先祖は出雲の一族であるという。

大村系について年次からは日典様より後になると思うも参考に左記事を附加する。大村九郎右工門家盛の子、父と同じく仕官せず野々口に居り、父歿して、家継農桑を業とし、叔父元盛の女を娶り、初め子なし元盛の孫六右工門の子同姓新兵衛を養子とす、其後七左工門出生、武井(後に竹井)吉兵衛の子となり代々農業、右によつて想像すれば、松田氏も滅び、元盛宇喜多に仕官以後は大村家財政として大体土地の豪農という格であつたか。大村六右工門細名久作、元盛の長男、初め宇

喜多左京亮に仕へて、「お小姓」、處が左京亮にクセがあつた、朝飯前に臣一名手打にすれば朝飯がうまい、明朝は六右工門が打たれる番じやと同僚が告げた、逃げて野々口へ歸つた、後池田新太郎少將から大庄屋仰付けられ万治三年十月十日八十六歳歿、岡山蓮昌寺日船万治元年或四月十二日遷化であるから日船聖人の活躍時代である。

大村次右工門即初名孫六、法名淨蓮、元盛の次男で、淨蓮へ授興の御先師からの御本尊もある、此人池田新太郎少將に仕え播州から因州へ更に當國をお供をした、次右工門に二男三女あつて、長男「良意」初めお茶取り小坊主になつて池田候に仕え、宇治えお茶取りに行く途中狂死、大村家二十五代目の弥三次も狂死されたといふ奇しき因縁。

丹沢五郎右工門即大村六右工門の嫡男都合つがうあつて津山城主森中將の家臣林源四郎の養子となつて延宝七未十一月二十八日八十七歳歿。

大村甚左工門即六右工門の三男延宝二甲寅四月十三日歿七十二歳歿。

さて結局日典師の父の断定がつかない、大村元盛だということ、大村系圖并に口碑は一致して居るが年次がどうも合はないようである。長門か出雲かを父とすれば——然し確たる系圖見当らない、藤原右行を父とする説此系譜も分らないが前記に

ある通り推定すれば、小坂の奥二郎の娘とあるのは実は高貴の藤原氏のかくれみのではなかつたか。

大村左工門監織の次男

父 大村左工門大夫元盛 | 日典師
母 吉尾の吉左工門の女 | 大村浅右工門
又 又は奥二郎の女 | 大村新八郎

右は大村家記録を参考して推定。但し問題かのころ。

又一説には、日典様は、

父、藤原右行
母、小坂の奥二郎、又は吉左工門の女 | 日典

右については日奥聖人が萬代龜鏡録の奥聖鑑拔萃のところ、「其本國は備州其曩祖を尋ぬれば悉くも孝靈天皇の苗裔なり」とある。孝靈天皇は第七代在位七十六、御壽百二十八歳、御宇の五年に琵琶湖が湧出して初めて出来た、此ご先祖がどういふ系統で大村家に及んで居るのか、とにかく先祖は藤原氏か、平氏かである、父の身分が高いか、小坂の母の身分はどうか、毒腹であるといふことの口伝がどうか、然しこれは後説する。

大村家え古記録の調査に行つたのが昭和十二年七月八日で現戸主大村盛長氏を以て二十六代續いて居るとのこと。

九、大村家所藏御本尊

御本尊には筆者と誰れに授けるといふ授與書があるのが普通であるので是等で大村家及び日典師御行動の傍証を得たいと思ふ。

一、日遊聖人、佐渡塚原山根本寺再興。

寛文第五^己、己酉五月中旬三日付で、大村半左工門法重授與之、とあるこれは大村盛儀のことか、此方^{かた}の大村家の位地並に行動は研究を要する。

二、日詔聖人、京都妙頸寺貫主、

慶長十年今月今日付、大村甚左工門達通授與之、これは系圖によると大村元盛、幼名歳若丸となつて居る、慶長となれば日典師はなくなつて居る、系圖では此元盛が日典師の父であるといふ一説もあるが、子がさきに六十五歳で死、父は九十からになつて居らねばならぬ勘定となるので、どうかと思ふ。

三、日典聖人、京都妙覺寺権大僧都二位法師、

天正八年^{庚辰}、首夏今日付で、大村才徳麻呂^為、招福授與之、とある、才徳丸は系

圖によれば大村出雲の長男家盛也、此時日典師五十三歳(天正八年は皇紀二二四〇)

前記天正七年三月付で大村盛之に授けられたものを合せると、家盛、盛之、兩人共大村出雲の子ではあるまいか。

四、日賞聖人、京都妙覺寺第十四世天文四年八月十八日遷化(自記二九五)

大永八年五月吉日、大村弥太郎息災守也、とある、これは大村長門盛長の事で同人は享祿七年(皇紀二二三三)八月十五日薨、大永八年は此年八月二十日以降享祿と改元、此長門が松田元際(又は澄か)の供をして京都妙覺寺へ行つた時授與せられたといふ、松田系譜では元際の名はない、これは元方の子元隆の誤かと(備前法華由來)

元隆は文明五年(皇紀二二三三)、岡山市大野、大安寺山上、富山城で病死して居る、然し大永八年は文明五年よりあと五十年も差あり、再考を要する、此大永(享祿)は日典聖人御誕生の年である。

五、日賞聖人、

大永四年^{甲申}三月十八日付で、(京都)王城高辻大宮法花堂妙覺寺俗別当松田左近將監藤原元澄^{又は}際^は、法名蓮孝授與之、とある。此本尊由緒書つけてある、曰く、此本尊は足利將軍より松田左近將監藤原朝臣元際^{あそみ}へ京都諸司代兼法花堂妙覺寺俗別当被付^申時授與されしもの、後大村長門盛長拜領し子孫に伝う。(大永四年から明治

二十七年迄三百七十一年に當ると大村家に旧記がある。

六、佛壽院日現聖人（池上八世永祿四年七月二十一日遷化六十七歳。日典師を附法せらる。）

天文十二癸丑卯月八日付で、備前大村歳若丸法名雲珍授與之、とある、歳若丸は大

村元盛の事、此文では六十五歳説では十六、六十歳では十一歳の時になる。

以上のほかは大村家に宝永、享和、天保、明治年間の本尊あるも、直接大村家に
關係もなく又典師事蹟の傍証にもならぬので畧する。

金川玉松城内にあつた道林寺の行方について、

道林寺縁起

仰も我山に安置し奉る、密迹、執金剛兩神は本郡金川卧龍山玉松城主松田左近將監
元際公大永年間足利將軍義晴公の命によりて京都諸司代及び玉城高辻大宮法花堂如
覺寺俗別当勤務中、同寺に於て佛工師多賀十郎なる者に仰せられ遂に刻成つて今寺
十四世正徳日賞聖人に開眼供養をうけ而して京都より玉松城内三の丸道林寺に遷座
せり、落城の後天正年間（日典師十六、七歳頃）宇喜多宰相公更に此地を賜ひ、当寺
を復興三の丸より諸佛等の尊像遷座し殊に当山は中国四ヶ本山の一にして末寺教
十ヶ寺ありとあり、寛文年間國命によつて末寺廢せられ当山は妙覺寺（京都）末徒と
なる。明治三十年丁酉五月落成遷座會之際書云

右の縁起について大村家として關係あるのは道林寺にあつた此二王尊、妙見

尊は大村家に預つて居つたのを後ち道林寺へ奉納したのだと現戸主大村盛

氏の言、故に代々寺の檀頭として優遇されて居る、優遇の一例として。

明治二十六年癸巳一月元旦沐浴焼香圖寫之、

（道林寺のこと）卧龍山

四十七世 日言

（元押）として、

大德院盛隆日慎居士

大智院好盛日隆大姉

大村慎三郎夫婦

右の如き戒名まんじらも当主の曾祖父へ授與されて居るなど。

ここに一言加えたいのは此様に昔城主が熱烈な信心家になつて一族家臣から出家
も出し又城内に寺まで建立して朝晩に城内から鐘の音がするといふ全く平和な姿で
あつたろう。今新興宗教と稱するものが信心集合の場をつくるに熱中し、施設寄附
に金を惜まない、全く信者夢中といふ誘導の仕方は果してどうなるだらうか、少数
のピラミッド頂上の指導階級がすべてを独占して、恰度共産の独裁のような格好に
なつて社会組織まで変貌するような事になる場合もあるらう、勤勞は宗教形式のみえ

捧げるべきでない均衡のとれる様に仕組まねばなるまい、先轍あながち捨てるべきでなかろう。

十、大村家系圖

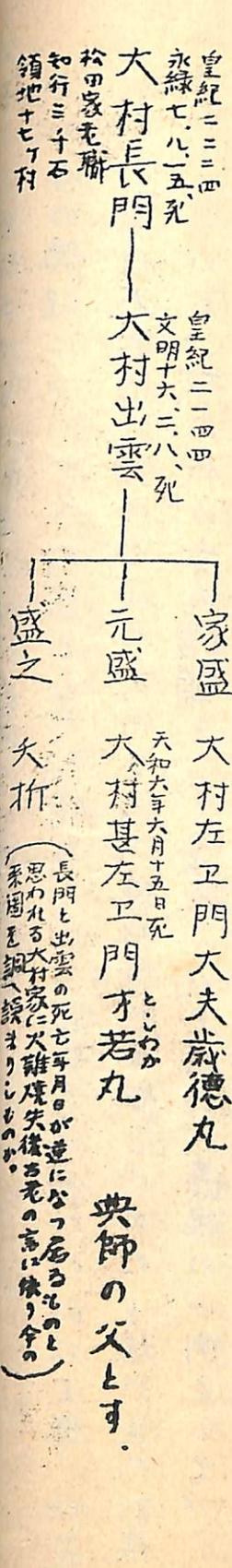
三冊一揃の分と他に巻物もあり一々目を通さなかつたが、典師に關係すると思ふ、年代辺を調べた（昭和十二年七月八日現戸主大村盛長氏）

系圖の巻頭に

享保十六年^辛夏五月中旬九日騰駕之、大村族子龜井十之丞正衛^{まさむね}正徳^{まさなり}（花押）

序文

姓平氏大村氏梶原傳謂梶原景時之裔也、中古以來仕于備州金川城主松田家改氏大村中^中羅^ら炳^{へい}燼^{けん}悉失普系其詳不可得知也。今幸得一二於同族老人之言而記其畧如左



石は平氏であるが、前記藤原右行となりば藤原氏であつて天津兎屋根命の至孝靈天玉となり世々祭祀を司るとなつて居る、果して御先祖はどうか、まだ前掲の系圖にも疑問がある、典師は六十五歳で文祿元年になくなつて居られる、父元盛の死はづつと後の元和であるから二十四年ものちになる、子が先きということもあるが再考を要する。

大村長門は野々口に居つて十七ヶ村を領有す、即ち、野々口、吉尾、小山、中山、^{からこう}辛香、^{すがの}東菅野、^{だばり}西菅野、^{ふかだわ}田原、^{なか}深瀬、^{こうやじり}中野、^{おほの}高野尻、^{おほの}大坪、^{おほの}大月、^{かみ}下牧、^{ゆき}湯次、^{たに}十谷、以上十七ヶ村即ち東は今の中鉄トンネルを越えて牧山駅方面、西は辛香峠を越えて菅野田原方面に及ぶ。元岡山市在、伊福郷に居つたのが野々口に移つた、野々口の小山の山の鼻で戦傷死した、長門の首塚というのがある。

大村出雲には三人の子があつたことになつて居る、典師は出雲の子ではないかと思ふが、大村系譜にはない、

大村元盛は金川城落城の際、松田氏の子左門を奉じて備中高松清水長左衛門の許に走り、天正年中籠城の際には搦手を守つたという、左門の子孫は清水と改め家臣となつたという、元盛は後ち小早川秀秋に從つて征鮮すとあり又宇喜多家に從ともある、元盛が朝鮮征伐出征中戦地から手紙が來て居る（大村家所藏）

去ル十月ニ各折紙被進之候、其時分我等疾來氣候、不申入候、定テ各々懇ニ可
被申候、共申入候、タワノ五郎左工門待伏、逢申レ越度仕リ候、九月十七日ニ候、其
外薄手共逢候者餘多候、皆々無何事候、小坂與二郎、當夏懇ニ申候、候哉是、
七月十一日ニ候法名道春ト申候、其外各がシマクサ無申計候云
日損水損之由承リ候無却心元猶且々御吉事可申上候恐々謹言

十二月十八日

(身ヲ文祿カ慶長カ)

圓頓院様

圓乘院様

性安公様

其外十九名宛になつて居る

系圖の中に、但し大村甚左工門元盛、宇喜多の士帳になし、宇喜多の士帳には、大
村與一郎千石、大村與介、大村藤次郎、大村某、計四人あるのみと、右老曰く、後
日先年先祖の事記して奉れとありし時、先祖書焼失、依つて一族寄合つて端々聞キ
伝へたる事、何の吟味もなく記して報告したる者ならん云とあつて宇喜多の士帳
にあるべきに、ないのは如何というに後世聞伝へを其益奉告したので残れたのであ

らうといひ矢張大村家や石碑では從軍を肯定して居るようである。前記手紙中に小
坂與二郎とあるは典師の母の父を指して居るのではないか。

大村家

野々口の本村ほんむらという所にあつて旧屋敷は面積約二反ばかりあつたが、現在は大部分
田圃になつて居るが周圍に石垣がめぐらしてあるので昔のおもかげを想像すること
が出来る、昔の家は草葺の庇ひさしの低い大きなものであつたが現戸主大村盛長氏の祖父
の代に取壊ち、現在ののは其のうしろにあつた離れ座敷の瓦葺のあつたのを前に出し
て之に雜作を加えたものとのことである。

十一、日典師の産湯井戸

野々口本村の大村家から西方約八丁、大字吉尾小字小坂こざき、今は船守和平氏の屋敷内
で裏口にあつて道路に接し、昔の形は一間四方ばかりの角井戸で、三つばかり石段
がついて居て、俗に杓井戸といつて極浅いもので石段を下りて杓で汲むようになつて居
たが、明治になつて當主が改造して今では丸ワクがいれられ少し掘つて約九
尺位の深さになつて旧形は存しないが、此部落の諸所にある井戸は何れも二丈位深

いものばかり、それでも旱天が激しいと涸れてしまふ、然し此井戸だけは浅いのに昔から涸れたことがないと船守氏がいう、昭和十二年七月八日午後五時頃私は現場撮影に行った時、部落の古老達集つて皆口を揃えて此井戸の不思議をいうて居つた。此井戸のそばにちさいお堂が建つてあつて、典師を祭る自然石の題目碑が其堂内に祭つてあつた、古老にさくに此石塔はいつ頃建つたか分からんという、年号不詳、だが、後年堂を建て、雨晒りしでは勿体ないとして中に入れたものと思う、そばに第百遠諱の木の花塔があつた、此小坂戸教約五十何れも農で山麓である、大部分受不施で、不受不施教派の信者僅か数戸ということであつた。

十二、四方堅め

日典師が村内安全のため、旧野々口地区の四方のスミえ四天王をまつられたといふ古跡がある、村人の口碑も一致して居る。四方の分は河田卯平氏のウラ山の麓にある欄塔式のテシマ石でぼろ／＼になつて年号不詳、然しこれは典師時代のものであるかどうかはわからない。四方にあるのが形が一定して居ない、西の分のランノウの正面に左の定紋があるがこれは大村家の紋ではない。



大村家の紋は



である。

南の方のは字さいぬきという所にあつて、東の方のは駒井山実成寺の池の奥にある、北の分は安井にあつてそれ／＼遺跡は現存して村の古老の言が一致して居る。

十三、日典師行場跡

駒井山実成寺跡の奥に池があつてそれを奥え／＼と駒井山の雑木雑草茂る中を谷間に沿うてわけ登る事約八丁余にして、見上げるばかりの大岩石がすわつて居る、其上が平らかで六畳敷位もあらう、そこで日典様が「行」をせられたという、端座断食などの行をなさつたものと思う、夏はともあぶなくて行けない、秋、冬は踏査が出来る。

十四、實成寺跡

本村のほんむら大村家から東北へ約二、三丁、山麓に駒井山実成寺跡があつて日典師九歳の時此寺に入り日悟聖人について得度せられたという、旧地面積約三反ばかりの廣域であつた、石垣のくづれた跡など目測で想定した、今は一部分草原、あとは田圃、大

公孫樹が一本あり長さ約十五間太さ二か、えではまだ手がとどかない、其附近に瓦草のお通夜堂のちいさいのが建つて居る、此実成寺の盛なりし頃は、備中妹尾町早島妙法寺にある古い過去帳によると、

備前國津高郡野々口有一梵宇謂豹井山実成寺也山主曰日悟聖人本堂、祖師堂、開山堂、鐘樓門、二王門、鎮守御社、客殿、庫裡、儼然並覺、常說法讀誦法華道場也矣乃至寛文中而有故実成寺為無住堂宇悉及頽破存者徒本堂一字而已後元禄三年庚午春移同邦藤野村今実成寺是也云

(藤野とは和氣ではなかと思はれる)

ここに特に記して其勞を謝したいのは、当時妹尾町中務春吉氏風に信仰熱烈、毎に憂宗の念に燃ゆ当時の管長佐藤日柱に随つて、前記過去帳の筆寫其他先師の遺跡、断片遺文など調査し記録以つて管長に奉仕されたこと同氏の記録よく存して居るので茲に典師の伝を編むにも有力な資料となつて居る、同氏は当時教員として相当多忙の身なるに寸暇をさいて歎身された、今此伝記を編むに当り今や故人となるも銘記して靈に告ぐ希くば老望の微心を諒せられよ。

十五、大村家に関する史跡

一、本村ハ駒井山、山の手の一つの部落名、今の野々口として一番戸数の密集して居る所である、昔此一帯が大村家の屋敷であつたようである。

二、札場ハ本村の西の方にあるあぶなで昔大村家の立札、即ち一般土民へ公告すべきものを出して居つた場所であつたらう。

三、河市ハ本村の東の方にある、現在旭河の川筋がブツと東の沖の方に巻つて居つて旧川筋のところは田圃になつて居るが昔は此河市は河岸で物資の集散地であつたと思う。

四、下座場ハ本村の北西方今の公会堂のある道に沿つて長刀型の田圃が近頃まであつた、それが、下座場、今は小字になつて居つて道路擴張で遺跡がなくなつて居る、大村家が出入の場合土地の民衆が此所に並で下座したものである。

五、出口ハ本村の西方にある「あぶな」で大村家の出口であつた、現在の大村家から約二丁も巨離がある。

其他北方に古河、片山、虫名(南)等のあぶなが残つて居るが土地の人に聞いても此分はわからない。

不思議に思う「おかげ」「ごりやく」とか又はとても常識では信じられない不思議な出来ごととか、そうした奇蹟は高德のおかたには当然あることであつて、宗教家ではなく宗教信者の熱心なかたにも必ずあるのが事實である、またよくない事にも因縁のめぐり合せというものもある、但し靈感を取引のように考ふる簡単なものではない、これに対する理論説明は此場合省いて、典師の奇蹟を左にしるそう。

1. 天竺靈鷲山の鐘の聲

日典様十四歳にして笈を負うて郷里野々口実成寺を出發、關東に遊學、池上本門寺日現聖人に師事、業を修められた、上杉景勝の謀臣直江兼續(かねつぐ)(景綱の弟)の帰依を受け請ぜられて佐渡に渡り、日蓮聖人の靈跡塚原根本寺再興其弟八世になられた、次で下総藻原妙興寺に移り第十三世となられた時に三十八歳、後、京都妙覺寺に入り弟十八世となられた。後年典師の高弟日典様は此時に生れたことになる、即ち永祿八年(万代曼鏡録奥聖鑑抜萃の項)ある時靈夢を感じて日典を得と、記録されて居る、日典様が京都妙覺寺日典様の弟子に入られたのは天正二年十歳であつた。

日典様が汝じほど何にもかもそろつてよいものはない(奥聖鑑萃七七三)とおほめになつた程の秀才高德、師事十三年間一日も朝のお手水を捧げることを怠らなかつた、此一事でも師へのお給仕のあつたことが窺える。或る時日典様が日典様へ向つて、おまえは毎日食事の刻限をあやまらないが、何を相圖に給仕して居るか、との仰せ、ハイ私は天竺靈鷲山の鐘を相圖にお支度を差上げています、日典様仰せに、おまえには其の天竺の釋尊の鐘がきこえるか、ハイ聞えます。其翌日の同刻限に、日典様は日典様へお支度の給仕をした、其時お師匠様只今天竺の鐘が鳴つて居ります御聞き下さいませ、そうかと日典様が耳を澄されると、確に閉ゆる天竺靈鷲山の鐘の音、オーあれが大聖釋迦牟尼世尊のまします靈山の鐘の音かと感嘆遊ばされ、しばしあつて、頼もしや汝は師よりもすぐれたる行者なりとお賞めをいたされたといふことである。うべなるかな、日典師御遷化後四年を出ずして、彼の有名な大佛供養事件が起り、日典聖人は敢然として時の天下太閤秀吉を向にまわし堂々と宗門の正義を主張し、宗界の墮落を叱咤せられ、身命をなげうち、法難を克服せられたのである。師日典の囑望空しからず、後代の鑑とすべきである。

2. 手拭 まんだら

日典様が学業成つて郷里(野々口)錦地へ御歸り遊ばし再び都へさして御出錫の時、吉尾小坂(よしむこさか)にいます母君は、夢にも忘れぬひさかたがりどとるものも取りあえずお見送りせんと駆けつけた時は、そ一日典様は旭河なる国々原の渡しを向うへ渡つ

があることに気をつけるべきである。すべて奇蹟は天地人の心をとらえてある。

十七 日典師の行徳

日典様は前記の通り野々口吉尾こせごの小坂の人、藤原右行すけゆき（世安公入道）の一男、実成丸として天文元壬辰年誕生。此記事は前記と異るところあるも、こゝうこゝうという説もあるので生かして置く、とにかく大村家と典師との関係などの各資料に今すぐ断定しない、何れにしても、日典師の存在をあらゆる角度からあきらかにするのが目的であるので讀者の諒承を仰ぐ。

九歳にして駒井山実成寺真淨坊日悟聖人に就て得度、日典師と稱す、院号は実成院であるので、どうしても実成寺入寺は名にちなんで見ても間違いないと思う、古い過去帳によると、内外の学蘊奥を極め十三にして法華三大部台當の違目を示じ十四歳にして実成寺に大会を設け初転法輪、堂々四箇格言を鳴りして破権門理、宗風振起、為めに貴賤隨喜渴仰、山陰、山陽、西海諸道権徒転じて正法に歸入するもの其數を知らず、之に依つて開基の梵刹等諸州に多く、或は佐渡根本寺再興十八世或は下総藻原妙興寺第十三世、京都妙覺寺第十八世、或は紀州宇治の吹上本光寺の創建、元龜二年信長叡山を焼くやいち早く藏書を妙覺寺にあがなあがない教界のため文献

の湮滅をふせぎ玉うなど。

- 一、演大法義 七千五百余座、
- 二、妙經讀誦 万有余部、
- 三、受法歸入 數百万人、（已上は早島に有る過去帳に據る）

文祿元年正月元日弟子衆を召して曰く、余已に生數つ今秋七月二十五日入寂すべし、余、晩齡妙經讀誦六万部の誓願ありといえども、果さずして終る、他日汝等繼いで之を果せよ、弟子相共に一心之を繼ぐ、慶長九年甲辰秋典師の第十三回忌に至り終に六万部成就すと、（万代龜鏡録奥聖仰せらる）

法華經一部とは昔から六万九千三百八十四文字の全巻をいう、昔は僧の修養にはお経拜讀、お題目を唱へるにあつた、今の僧の多くは商賣經は讀む、葬式法事とか御布施になるお経をいう、ところが本堂に法味献上のお経がおろそかになつて居るので本堂がさびしきやう、どことなくヒンヤリして居るとの評がある、あたりはずと雖ども遠からず、儀式的のお経必ずしも無意味ではないが反省を要する。今の僧多くは肉食妻帯をして居る末法に於て此是非はいはないが清僧と自称する者必ずしも道念堅固とはいへない、清僧をてらい、陰險で活気なきこと籠の鳥にも劣る者あり、行者

のミイラとも称すべきか、これも反省を要する。新らしい魅力なきところ法も魅力
を失うことある。戒心善処すべきである。

十八、日典師のお弟子

現在拜見の記録では弟子十三人、法類四十余人とある、前記したように、寺の建
立、再興とも十数ヶ寺に及んで居る。宗門の教育家、宗門経営者として偉大なる人
物である、今のように文化の科学機構の便が何もない時代、此分としては全く原始
的時代に、時代を歴する縦横教化の実績は備前法華開創の大覺大僧正に次ぐお方
あつて弟子日奥と共に備前法華史上に永劫の光を放つてあろう。

其お弟子

- 一、佛性院日奥 寛永七年三月十日午刺六十六歳
- 二、教藏院日生 日習師の師 文禄四年乙未七月十四日四十三歳
- 三、長遠院日樹 寛永七年庚午五月十九日
- 四、寂靜院日賢 正保元年甲辰八月二十四日正法治国論作
- 五、本壽院日船 万治元年戊戌四月十二日 讀經五三。余部
- 六、遠壽院日亮 慶安三年卯六月十九日

七、修徳院日經 不詳

八、城国院日鳳 全

九、守玄院日領 吉港十四世、慶安元戊子十一月二十三日

十、自證院日認 元和三己四月十九日 四十九歳

十一、化城院日城 備前金川妙国寺にて四月二日遷化

十二、守玄院日誠 野呂談林弟ニせ演説に秀ず、寛文四年八月九日

十三、日精

以 上

さて前記の弟子日經聖人は備前現在御津郡尾上おのうえの堂丸どうまるの地婦妙山妙法寺蓮華院に住
し其弟子哲道院日唱に至り堂丸と野々口駒井山を兼務、寛文中実成寺無住、堂宇
頽廢、本堂一字而已、元禄三年庚午春之を和氣藤野村に移す、堂丸も亦池田新太郎
光政の厄にかつた。上道郡原村の郷士中村作左工門秀秋は戸川肥後守(備中撫川
の殿様)に同伴徳川家康の家来けらいとなつて関ヶ原戦に戦功あつて、備中、賀陽、都宇、
両郡二万五千石を賜はつた、そして前記の城国院日鳳聖人に帰依武運長久満願の故
を以つて妹尾に二千坪、撫川に一千坪永代下しおかる、後ち秀秋が早島領主に召抱
えらるるに及び之を早島に誘致、蓮華院を結ばしむ、今の番神社は其旧地、今の寺

地（妙法寺）は同藩士の小野貞石工門の旧宅地である。

以上日典師得度の寺、実成寺から尾上の堂丸に移り次で妹尾早島の地に、ここで直接の系路は終つて居るようである。

日典師は実成寺から東京の池上本門寺へ、京都妙覚寺へ其他転々法輪の活動あつたが、しまいは妙覚寺で終つて居られる。

十九 日典師著書

妙正物語などある（岡山教養蔵）その他は、實は此際御著書を調べて学説をお伺ひしたかつたが其処まで行けなかつた、然し前記古い過去帳にある通り、業成つて初転法輪、四箇格言の論道、乃至三大却内外学見を具えられたなどの記録を見ると祖述の権識十分、勇氣ある教法実践のスカクが窺える、又お弟子十三人の中、岡山蓮昌寺日船、池上日樹、妙覚寺日奥の巨星何れも折伏立教の不受不施主義で有名であるので日典師の教育方針も想像できる、日典師のお題目の筆法は柔軟性であるよう御人格の豊かさが窺える。

後記

此度管長の命を受けて自筆・自刷、製本というわけでプリントにしましたが何分原稿草案を示されたのを省、加、適当に致したつもりであるが正鵠を得たかどうかを心配して居ります。

日典聖人の史跡の上梓発表が殆どないので大に遺憾とし取り敢えず公表されたわけです。

私は無習筆にてプリントにした為め字体至つて良しからず讀者諸賢に無評に希う。

此本の諸経費は岡山教会所属蓮華婦人会寄附。

昭和三十八年三月一日

日蓮講門宗庶務部長 太田日唱

替筆寫

於

岡山市上伊福一〇四七ノ一
日蓮講門宗岡山教会